

---

# 売り家

岳石祭人

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

売り家

### 【Nコード】

N2235D

### 【作者名】

岳石祭人

### 【あらすじ】

ふと見た「売り家」の折り込み広告。そこは小学校の級友の家だった。仕事帰りに当時の友人に20年ぶりに会い話をすると・・・。

(前書き)

パソコンの整理をしていたら出てきました。  
オーディオブックスな幽霊話です。

朝新聞を読んでいて何気なく折り込み広告を見ていたら一軒の売り家のチラシが入っていた。何気なく住所を見たらわりと近所だった。簡単な地図が載っていて、

「ああ、この酒屋。この小路の三軒目って・・あれ？」

そこは小学校のクラスメートの家だった。はるか大昔の話で、その子とは二年いっしょのクラスだったが、特に親しいわけでなし、その家にも二度ほど他の子たちと遊びに行っただくらいで、小学校を卒業してからは一度も会っていなかった。

ふうん・・と、特に気にも留めなかったのだが。

その夜。そういう時には何か偶然の因縁というのがあるのか、駅前でその時のクラスメートにばったり、二十年ぶりに会って、いっしょに飲んだ。そこで

「そういえば今朝のチラシでH君の家が売りに出されてたな。H君どうしてるんだろっねえ？」

と訊いたら、ちよつと嫌な顔をして、

「知らないのか？ 死んだよ、H。中学の時、事故で」

と教えられた。そうか、自分は小学校卒業と同時に県外に越してこつちには就職で戻ってきたのだ。

そうかあ・・、死んでたのかあ・・・。

たしかH君は一人っ子だったと思うから、家を継ぐ人間がいなくなってしまうたんだろっか？・・。

旧友と別れて、それっきり。取りあえず話はお終い。

ところが半年ほどして、またH君の家のチラシが入ってきた。よく覚えていないがだいぶ売値が下がっている。

ああ、そうかあ、なかなか売れないんだな、と思った。

その日は土曜日で、会社は休み。一日ごろごろして、夕方近所のスーパーに買い物に出た。そこで

「おやまあ、Ｔさんじゃないの？」

と、小さなお婆さんにニコニコ笑いかけられて、さあーて、誰だろうなあ？・・・と困った。そしたら

「お久しぶりねえ。Ｈの祖母でございます」

とお辞儀された。わたしは覚えてなかった。大昔に会ったかどうかも分からない。いや、そういえばたしかおばあちゃんがいたような気がする、Ｈ君の家に遊びに行ったとき。

「ああ、Ｈ君の。そうですね、お久しぶりです。失礼しました」

と挨拶を返した。しかし、変ではないか？　なんで自分なんかのこと覚えているんだろう？　小学校の、子どもの頃の話だ。おばあちゃんはニコニコしてこっちのを見ていたが、こっちももう年が年だ、おばあちゃんも相当のお年だと思が、見た感じ八十くらいだろうか？　背中が丸まって小さくて元気そうではあるんだが・・・。

「ああ、Ｔさん、久しぶりに家に遊びにいらっしやいな。陽一も喜びますから」

と、わたしの袖を掴んで誘った。ニコニコ笑って。陽一というのがＨ君の名前だ。

ああ、そういうことか・・・、

と、困ってしまった。呆けちゃっているようだ。年寄りは大昔の些細なことを鮮明に覚えていたりする。つまり、今、Ｈ君が中学校で亡くなってしまったことを忘れてしまって、昔、小学校の二度ほど遊びに来たどうでもいい友だちのことを覚えているのだ。こっちはもう見ての通りのおっさんになってしまっているのに。

さて困った。家は売りに出されているのだ、まさか今もそこに住んではいないだろう。おばあちゃんが家族、Ｈ君のお父さんお母さんと一緒に住んでいるのか、それともどこかの老人ホームにでも入っているのか、わたしには分からない。

「ぜひいらつしやつて下さいな」

と袖をずーっと掴んだままニコニコ言うものだから、しょうがない、お呼ばれすることにした。きつと家には鍵が掛かっていて入れないだろうし、となりの人に訊けばおばあちゃんの今の家も分かるだろうと思った。

このおばあちゃんが、やたら元気で、歩き出すとちよこちよこちよこちよこやたらと早足だった。こっちの方がついていくのがやつとのかくらいに。

近所の近所だからほどなくH君の家に着いた。この小路は塀の高い大きな家が並んでいて、ちよつとしたお屋敷街で、H君の家もその例に漏れず大きい。そういえば遊びに来たときに高そうなオモチヤがいつぱいあったような気がする。

さてどうするのかと思ったら、おばあちゃんは鍵を取り出してさつさと玄関のドアを開けてしまった。さあどうぞ、と。わたしは途方に暮れる思いがした。

広い庭の見える客間に案内されてお茶を出された。庭もきれいに手入れされていた。はて？売りに出されていたのはここじゃなかったのかな？と思った。おばあちゃんは

「陽一はすぐに帰って来ますからちよつと待つてて下さいねえ」と、奥に引つ込んでしまった。さてさて、困った。

しばらく待つて、．．おばあちゃんも引つ込んだまま戻つてこない。だんだん薄暗くなつてきて．．．なんだか胸がざわざわ嫌いな気分がしてきた。

「おばあちゃん。おばあちゃん。どちらですか？」

と声をかけても返事がない。廊下から奥を見るとすっかり暗くなつたところに西の窓から一条真つ赤な夕日が射していて、．．．わたしはなんだかひどく怖くなった。

そこで、おいとま、逃げだそうと思つた。玄関に戻ると、  
「わあっ」

と驚いて声をあげた。暗い中何か置物かと思つたらおばあちゃん

が隅にじいつと立っていた。ニツコリわたしを見て、

「ほら、帰ってきましたよ」

と、視線を。玄関の引き戸がガラガラガラ・・・と開いて、

「やあ。久しぶりだねえ、T君」

と。わたしはゾツとして、なんでなんだ！？と思った。なんでわたしなんだろう？と。なんでたいして親しくもなかったわたしを招いたりしたんだろう？

H君は背が高く細くて、いかにもお金持ちのお坊ちゃんみたく品のいいにこやかな顔をしていた。・・・わたしの知っている小学生の姿をしていた。

H君は靴を脱いで上がってきて、

「おいでよ、遊ぼう」

とわたしを誘った。わたしは壁にへばりついて、

「なんでわたしなんだ？」

とカラカラに乾いて痛くなった喉で言った。

「特に仲が良かったわけじゃないだろう？」

と。H君はしらっとした目で、

「うん。そうだね。しょうがないよ、君しか引つかからなかったんだもん。ねえ？」

と、おばあちゃんに言うのと、

「ええ、残念ですけどねえ」

と、カタカタ真つ白な骸骨が笑った。わたしはヒヤアツと悲鳴を上げて、見ると、H君は少し大人、中学生の姿になって、口と鼻からダラアーツと血を垂らして、

「遊ぼうぜ」

と手を伸ばしてきた。わたしは悲鳴を上げて玄関に飛び降りて、「開かないぞ」

と言われたけどドアを引いたらガラガラ開いて、大慌てで逃げ出した。後ろで「チツ」と、H君の舌打ちするのが聞こえた。

翌朝H君の家に行ってみると、門扉の外にわたしの靴が揃えて置

いてあつた。玄關まで行く気にはならなかつたが、チラリと見た庭は雑草がぼうぼうと生えていた。

H君はとつくに死んでいて、確かめたわけではないけれどお婆あちちゃんも亡くなっているんだろう。

後日それとなく表の酒屋で聞いてみると、やっぱり出るんだそう  
だ、H君の幽霊が。それでなかなか買い手がつかないんだろう。

おわり

(後書き)

ありがとうございました。

稲川淳二さんの「溪谷の旅館」のパターンです。これをパクリと言  
つてはいけません。怪談の場合はバリエーションを楽しむのが良い  
鑑賞法かと。

2007、12、13(2006、8、29)

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2235d/>

---

売り家

2010年10月8日14時56分発行